

発達障害児に対する担任教師の態度と 児童の学級適応感の関係に関する学校心理学的研究

田中 健 梶原 由貴 浅川 潔司

1 研究目的

浅川教授らは、AD・HD児が在籍する学校とそうでない学校での学級適応感を検討した結果、教師の態度が児童の学級適応感に影響を与えている可能性が示唆された。そこで、本研究では、担任教師の発達障害児に対する態度とその学級の学級適応感の関係について検討する。

2 研究方法

鳥取市立佐治小学校4～6年生42名（男子24名 女子18名）児童とその担任教師（3名）が本研究に研究協力者として参加した。

指定されたとおり、児童には、集団場面において一斉に質問紙を配布し、教師については個別に質問紙を配布して実施した。児童・教師に対する教示として、「この調査は学校の成績（仕事）とは無関係であること」「個人の秘密は守られること」「回答しなくてもよいという権利があること」「調査内容は研究の目的にそってのみ使用されること」を伝えた。調査期日は、平成23年6月9日であった。

3 結果から

学級適応感の因子分析の結果から、第1因子「集団での規律・役割」は、 $\alpha = .89$ 、第2因子「教師との関係」は、 $\alpha = .86$ 、第3因子「級友との関係」は、 $\alpha = .79$ 、第4因子「学習における積極性」は、 $\alpha = .82$ であった。

教師の性別障害観水準群別の学級適応感得点の平均値の結果から、「集団での規律・役割」の下位尺度において性の主効果は、女子群の平均得点は男子群のそれより有意に高くなっていた。が、発達障害観の主効果や交互作用は有意ではなかった。

教師との関係の下位尺度において、いずれも主効果及び交互作用についてはともに有意ではなかった。

級友との関係の下位尺度において、性で女子群の平均得点は男子群のそれより高い傾向がみられたが、交互作用は有意ではなかった。

学習における積極性の下位尺度においては有意な性の主効果が認められ、男子群の平均得点は女子群のそれより有意に高かった。また、発達障害観にも有意な主効果がみられた。が、交互作用は有意ではなかった。

4 考察から

学級適応感の下位尺度ごとにみると、「集団での規律・役割」においては、男子群よりも女子群の得点が有意に高い。このことは、女子の方が男子よりもクラスでの学習や活動を通してクラスとしてのまとまりを意識しているといえる。学校における日常生活をみても、確かに女子は男子に比べると、親和性を求める傾向がみられ、相手に合わせて行動することが上手であるように感じる。このことは、この時期（思春期の入り口）の女子には、母性としての本能（保守性）が芽生えつつあることも大きな要因のひとつであると考えられる。また、そのような親和性が、いびつな形でのまとまりになると、自分たちのグループ以外の人を排除していくという行動になって表れることにも繋がっているように思われる。

「級友との関係」についても、女子の方が男子よりも得点が高い傾向がみられ、女子の方がクラスの友達との関係が強い可能性が示唆されている。男子は外での遊びを通して集団を形成していくことが多いのに対し、女子はクラス内でのおしゃべりなどを通していくつかの独立した集団を形成していくことを示している。また、そのような遊びの傾向から、男子はクラス外での広がると考えられ、女子は男子に比べクラス内での友人関係が親密だと言えそうである。このことは、子どもたちの人間関係を形成する上で、「遊び」がたいへん大きな役割を果たしていることを改めて示唆している。

教師の障害観水準においてH群よりL群の方が高い学級適応感得点を示す傾向が見られ、L群の方が級友との関係が強い可能性が示唆されたことから、教師は平等に子どもに接することが大切であること、軽度発達障害を有すると思われる子どもへの集団での指導について、教師へのアンケートから、対象児童以外の他の児童へ十分に目を向けなければ、支援を行ってもうまくいかないことを示唆している。さらに、場合によっては、学級の他の児童の批判的・拒絶的な態度に対象児童が気づき、受容的な態度を示す教師との関係のみが強化される可能性を示している。これらのことから、教師が発達障害を有する児童に対して手厚く接していると他の児童からは関わりが偏っているように見え、平等観を得られないことが分かる。このことから、クラスの友達から受容されにくい可能性が示唆される。日常の学校生活において私たちは、どうしても軽度発達障害を有すると思われる子どもへ、知らず知らずのうちに手厚い対応をしているように思う。このことは、そのまま軽度発達障害を有すると思われる該当児童への十分な理解ができていないことや該当児童とのしっかりとした関係性が築かれていないことに大きな要因があるように思う。また、他の児童へ当該児童への理解も不十分であることにもよっているように思われる。

「学習における積極性」においては、男子群の平均得点は女子群のそれより有意に高く、男子の方が学習に対してより積極的であることが明らかになった。これは、挙手行動と自己効力との結びつきが強いことを示唆している。また、男子は学年が上がっても

自己効力が余り変わらないのに対し、女子は学年が上がるにつれ自己効力が低下し、挙手について積極的でないことを示した。なお、先行研究では、女子はしっかり聞き、宿題をきちんと行うという結果も示されている。この項目については、発表や授業中の発言という項目から構成されているため、そのような結果が得られたのではないかと考えられるが、男子の方が学習における積極性が高いのは意外であった。ただし、先行研究が示すように、この年代の女子は、間違えることへの抵抗やまわりの友達を男子以上に意識することなどから、発言を控えるという傾向がみられるのであって、決して学習に対する積極性が男子に比べて劣るとはいえないのではないかと。また、男子は、発言に置ける積極性が認められるものの、女子ほどしっかり聞きとれていないことや宿題をきちんとやれていないことなどから、授業での積極性は表面的な積極性に留まっていることも考えられる。

教師が発達障害を有する子どもの特性を肯定的に見ているクラスの方が学習における積極性が低いことが明らかになっている。学級においては、児童・生徒の内面的問題を重視する教師の学級の方が、教師と児童・生徒の人間関係もよく、児童・生徒同士のまとまりもあり、学級へも適応的であることを示している。このことから、教師の態度が児童・生徒個人だけでなく、学級全体にも大きく影響していることが考えられるのだが、例えば不登校傾向の児童に対して、適切な対応をしているつもりでも、他の自答からみれば必要以上に特別扱いをしているように見られているかも知れないことは十分留意しておかなければならないことである。また、「教師が発達障害を有する子どもの特性を肯定的に見ているクラスの方が学習における積極性が低いこと」からも、教師は十分にクラス全体の児童を基盤にして、当該児童に向き合わなければならない。改めて子どもたちと向き合う姿勢である、「子どもたちにはいつも平等である」という姿勢を崩してはならない。

教師が学級児童に対し、受容的・共感的な態度をもって指導行動を意図的に増加させれば、操作児童による教師や級友との関係、学習への意欲など、学級適応感が肯定的な方向へ変化することを示しているが、特定児童以外の児童へは教師の指導行動が学級適応に影響を及ぼすことはなかったこと及び教師の関わりが特定児童に偏ってしまうと非対象児は教師からの承認感が低いことが示されている。このことから、教師が肯定的な発達障害児観を有していても、対象児童へは伝達されるかも知れないが、他の児童へはなかなか伝わらず、教師から自分たちのことを認められていないのではないかと感じるようだと考えられる。このことは、教育の現場では、交流学級の担任より特別支援学級の担任の指導行動に表れる場合が多いように思われる。本研究の「発達障害児に対する担任教師の態度」とは直接的には関わらないことではあるが、他の児童は、特別支援学級担任の自分たちへの関わり方も、よくみているから、その辺りにいても配慮していくことが大切だと思う。

以上のことから、教師の発達障害観と学級適応感の関係については学習における積極性と級友との関係に関して、教師から児童に対して影響があることやその可能性が示されている。また、学級づくりについては、発達障害を有する児童だけでなく他の児童を我慢させない学級づくりを心がけることが必要であることが考えられる。教育現場では多くの場合、担任教師はそのようなことを踏まえながら、学級づくりを行おうとしている。だが、これらの具体的なデータをもとにしての学級づくりは、より確かな学級経営に繋がる。発達障害を有する児童の特性を十分に踏まえながら、他の児童と同じように接していくためにも、教師がクラスの子どもと一緒にいる時間の確保とその時間のスキンシップを大切にしていかなければならない。

5 研究を終えて

本校にも特別支援学級があり、支援学級の児童は、当該学年の子どもたちとの交流も適切に行えている。また、当該学年のみならず、当該児童と他学年児童との交友関係も良好である。本研究から導かれた「教師が発達障害を有する子どもの特性を肯定的に見ているクラスの方が学習における積極性が低いこと」「教師が発達障害を有する児童に対して手厚く接していると他の児童からは関わりが偏っているように見え、平等観を得られないこと」からも明らかなように、当該児童への特別な対応を極力しないようにしていることが、望ましい学級づくりに繋がっているように思われる。

本研究の目的の主旨とは異なるが、「級友との関係」の調査において、子どもたちの「遊び」が子どもたちの人間関係を形成する上で、たいへん大きな役割を果たしていることを改めて示している。学力重視に偏りがちな今の学校教育において、見落とされがちになっているであろう「子どもたちを自由に遊ばせること」の重要性について改めて考えさせられる機会となった。「子どもの世界」が減っていることが、人間関係づくりにも大きな影響を及ぼしている。特に低・中学年までは、もっとみんなと一緒に遊ぶ経験を積ませる必要がある。私たちは「子どもたちにとって遊びの場は人間関係づくりという大切な学習の場である」ということを忘れかけているのではないだろうか。学校教育現場で子どもたちと直接向かい合っている私たちだからこそ、本気で子どもたちが自由に遊べる時間と場を保障してやらなければならない。勉強ばかりしていても心の健康は育まれないことを、もっと親や教師、社会や行政に発信していく必要があると思う。

最後に、すべての教師が望ましい発達障害観を身につけているというわけではない。今後とも、発達障害を有する児童への理解だけでなく、他の児童を我慢させない学級づくりを心がけていくことを忘れてはならない。